怜野集

夏

土岐文庫
文庫17
W46
3

首夏　首夏惜春　山家首夏　首夏藤　首夏待郭公
首夏郭公　更衣　惜更衣　更衣惜春　寄更衣述懐
未更衣　早夏　早夏鶯　社頭早夏　未忘春花
餘花　尋餘花　尋見餘花　賞餘花　山餘花
餘花浦河　餘花留人　遅櫻　山深一櫻　新樹
野新樹　新樹妨月　雨中木繁　卯花　暮見卯花
夜卯花　卯花混月　卯花如月　卯花如浪　垣卯花
卯花連垣　卯花誰家垣根　卯花隣家　卯花隠宅　山家卯花
不尽卯花　遠村卯花　故郷卯花　里卯花　林下卯花
橋邊卯花　野径卯花　卯花隠路　卯花細一路　水郷卯花
水邊卯花　名所卯花　卯花未遍　卯花盛開　卯花似雪

文庫 17
W46
3

昭和六十年二月一日
土岐善麿氏寄贈

0101851?4871

卯花留客　社頭卯花　葵　挿葵　寄葵述懐
寄葵懐旧　加茂祭　郭公　尋郭公　日々尋郭公
引友尋郭公　衆人尋郭公　尋処待郭公　尋処聞郭公　待郭公
久待郭公　年々待子規　日中待郭公　夕待郭公　夜待郭公
閑夜待子規　郭公勝待聞　對月待郭公　涼夜待郭公　終夜待郭公
暁待郭公　待郭公空明　連夜待郭公　毎夜待郭公　雨中待郭公
旅人待郭公　老人待杜鵑　独待郭公　家々待郭公　秘居待郭公
常待郭公　名所待郭公　社頭待郭公　関待郭公　里待郭公
故郷待郭公　山中待郭公　山家待子規　對藤花待郭公　對卯花待郭公
對橋待郭公　未聞郭公　五月未聞郭公　待聞郭公　更待郭公
人傳郭公　初郭公　始聞郭公　聞郭公　遥聞郭公

遠聞郭公　近鳴郭公　両方聞郭公　郭公何方　年々聞郭公
終日鳴郭公　日々聞郭公　夕聞郭公　薄暮聞郭公　暮々鳴郭公
夜聞郭公　連夜聞子規　隔夜（ヨガレ）郭公　閑夜鳴郭公　涼夜郭公
深夜郭公　終夜鳴郭公　月前郭公　夢中聞郭公　郭公驚夢
郭公驚眠　寝覚郭公　暁月聞郭公　暁郭公　曙郭公
朝聞郭公　郭公一聲　郭公希珍　終聞郭公　忍音郭公
郭公聲幽　郭公過　郭公早過　郭公未飽　郭公未遍
郭公遍　毎家聞郭公　郭公所々　郭公聲頻　郭公數聲
郭公稀　待客聞郭公　独聞郭公　老聞郭公　郭公如恋
雲間杜鵑　雲外郭公　雨中郭公　雨後郭公　山郭公
郭公出山　山路郭公　禁郭公　樹間郭公　林郭公

森子規　岡郭公　野郭公　旅中郭公　旅宿郭公
関路郭公　海邊郭公　舟中聞郭公　水路郭公　海路聞郭公
渡杜鵑　水上郭公　河郭公　江上聞杜鵑　名所郭公
社頭郭公　寄神祇子規　古寺郭公　故郷郭公　古宮郭公
禁中郭公　里郭公　山家郭公　田家子規　閑中郭公
郭公鳴橘　對卯花聞子規　聞四月杜鵑　五月聞郭公　五月五日郭公
五月晦子規　閏五月郭公　郭公欲歸　郭公過山　更戀郭公
杜鵑催戀　寄郭公述懐　子規増述懐　寄子規懐旧　花橘
植橘　花橘初開　花橘風　花橘薫風　雨中盧橘
夕花橘　夜盧橘　雨夜花橘　橘薫　盧橘薫袖
盧橘薫枕　橘遠薫　禁庭橘　故郷花橘　簷前花橘

隣橘客来　折橘　橘知昔　對盧橘思昔　寄橘祝
寄花橘述懐　寄橘懐旧　楝花あふち　早苗　採早苗
里早苗　山田早苗　山畔早苗　澤邊早苗　遠早苗
近早苗　名所早苗　急早苗　雨中早苗　雨後早苗
寄早苗祝　五月五日　五月五日雨　薬玉　端午述懐
菖蒲　曳菖蒲　尋引菖蒲　年々曳菖蒲　簷菖蒲
葺菖蒲　貴賤葺菖蒲　毎家葺菖蒲　袖上菖蒲　雨中菖蒲
名所菖蒲　沼菖蒲　江菖蒲　澤菖蒲　池菖蒲
水邊菖蒲　旅宿菖蒲　寄菖蒲述懐　寄菖蒲懐旧　梔子花（クチナシ）
箏　五月雨　初五月雨　夕五月雨　夜五月雨
連日五月雨　五月雨久　山中五月雨　杣五月雨　牧五月雨

野五月雨　山路五月雨　行路五月雨　野路五月雨　旅行五月雨
旅宿五月雨　旅泊五月雨　山家五月雨　田家五月雨　庵五月雨
田五月雨　山田五月雨　川五月雨　江五月雨　濱五月雨
岸五月雨　橋五月雨　渓五月雨　池五月雨　沼五月雨
海邊五月雨　塩屋五月雨　五月雨舟　湊五月雨　浦五月雨
水邊五月雨　名所五月雨　五月雨有餘　五月雨難晴　五月雨將晴
五月雨晴　五月雨述懐　五月雨懐舊　螢　夜螢
涼夜螢　深夜螢　庵螢　窓前螢　腐草化為螢
螢火似漁火　螢火如玉　螢火似灯　草螢似露　螢火似星
叢中螢　山中螢火　川螢　澤邊螢　湖上螢火
江螢　螢火照舟　名所螢　螢火秋近　水鶏

水鶏所々　夜水鶏　水鶏経夜　寝覚水鶏　月前水鶏
曙水鶏　暁水鶏　閑居水鶏　山家水鶏　水鶏何方
兩方水鶏　夏月　對泉待月　夏夜暁月　暁更暁月
短夜月　夏月易明　夏夜翫月　夏夜惜月　夏夜月遅
夏月待人　更夜月明　水夏月　夏月浮水　水上夏月
河上夏月　磯夏月　谷夏月　山中夏月　名所更月
樹間夏月　雲間夏月　雨後更月　夏月涼　依月夏涼
夏月似雪　夏月似霜　夏月似氷　荒屋夏月　夏月如秋　寄夏月述懐
瞿麦（なでしこ とこなつ 同）　唐撫子　野撫子　名所撫子　庭床夏
籬撫子　撫子色々　瞿麦勝花　折撫子　露撫子
惜瞿麦　見床夏　垣根見撫子　独見床夏　夕撫子

雨夜思瞿麦　撫子厭露　瞿麦露滋　瞿麦帯露　夏草
朝夏草　庭夏草　深庭夏草　籬夏草　野夏草
森夏草　行路夏草　旅中夏草　渡夏草　海辺夏草
草深隠船　江夏草　名所夏草　雨中夏草　雨後夏草
夏草滋　夏草漸深　夏草深　夏草花　苅夏草
草待秋花　草花先秋　秋花夏開　野草秋近　鵜川
夕鵜川　深夜鵜河　名所鵜川　瀬鵜舟　鵜川篝
近鵜舟　遠鵜舟　遠村数遠火　里数遠火　浦数遠火
照射　山中照射　深山照射　野照射　沢辺照射
名所照射　峯照射　連夜照射　暁更照射　照射至暁
蝉　晩風聞蝉　閑中聞蝉　晩夏蝉声　蝉声秋近

寄蝉述懐　蛍　蓮露　風前荷露　蓮含露
夕顔　瓜　扇　氷室　夕立
夕立雲　市夕立　川夕立　暮夕立　野夕立
納涼 避暑同　納涼風　樹陰納涼　松陰納涼　竹間納涼
杉陰納涼　森納涼　山家納涼　山陰納涼　浦納涼
船納涼　河辺納涼　水辺納涼　納涼至暁　夜納涼
対泉忘夏　夜対泉　泉声入夜涼　泉辺翫月　樹陰翫月
掬泉　松下泉　松下掬泉　涼風　涼風吹蓮
涼風吹竹　松風秋近　夜風似秋　晩風似秋　水閣晩涼
樹陰晩涼　松下逐涼　水辺涼自秋　樹陰留客　樹陰隣秋
晩夏涼　夏祓　河夏祓　瀧夏祓　夜夏祓

名所夏祓　六月祓　水邊六月祓　日暮六月祓　名越祓
荒和祓　秋隣一歎　六月晦の日　夏はけふ　夏雨
晩夏雨　夏風　夜風寄　夏露　夏夕
夏浦夕　夏山夕　夏夜　夏夜興　夏夜船
竹風驚夢　夏曉　夜山　夏森　夏里
夏故郷　關路夏　夏餞別　夏旅　旅行聞蟬
夏旅宿　社頭夏　夏寺　夏井　夏河
夏瀧　夜海邊　夏舟　夏鳥　夏獸
夏狩　夏野　夏夜　夏氣　夏聲
夏眺望　夏人事　夏述懐　夏懐舊　夏釋教
夏祝　夏神祇　夏神樂　夘月　五月
閏五月　六月立秋　閏六月七日

早稲田大学図書

拾遺集巻之三

夏之部

首夏

後拾遺　桜色に染し衣をぬぎかへて山ほとゝぎす今日よりぞまつ　和泉式部

新勅　[illegible]

[illegible]

[illegible]

首夏惜春

[illegible]

山家首夏

[illegible]

首夏藤

拾　夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にとのみも思ひける哉　重之

首夏待郭公

新勅　[illegible]

暑夏部上

夏衣

勅 夏衣たちきてきる今日よりは山郭公なきそめぬらん　大武

続 峯さびしけさ山は峯の郭公音にも鳴くなりて　行能

代 すぎやなけ山郭公春くれて花さびしかる人のためにも　為家

い 鳴かずとも郭公と待たれし山里の今日よりは　貫之

六 明けぬる月日に夏の衣に咲く卯の花の郭公　上陽院

反 今日よりは夏の衣になりぬれどきる人さへや　能宣

拾 鳴き初むる郭公時鳥の声も夏衣たちきる　為家

今 花散とひとめも夏衣たちやかへぬらん風の　忠房

千 夏衣花の袂にぬぎかへて春の形見の　家隆

新 今はとて桜の衣をぬぎかへし夏は来にけり　兼実

い あかつきの夏衣たちやかへつる衣の　雅有

有 もえにけり夏の衣ぞ千鳥の声に　昌俊

代 いかにせん花の袂をぬぎかへて　仲実

惜夏衣

月 今日よりは衣の袂をぬぎかへて夏衣をかへし　家中

六 花の袂の衣に着かへて夏にまたかへし　定之

代 惜しむべき花の袂を夏衣たちかへて　俊成

い 今日よりは花の袂をぬぎかへて　小町

代 うつりゆく花の色の袂をぬぎかへて　西行

金 夏衣花の袂をぬぎかへて　師光

夏衣惜春

月 をしみつつ花の袂をぬぎかへて　家隆

代 いかにせん花の袂をぬぎかへて春の形見に　為家

夏衣かへ

月 わすれじな花の袂をぬぎかへて　定家

代 今日よりは夏の衣になりぬれど　光俊

古 春の花の袂をぬぎかへて夏衣　雅経

早夏

反 郭公ほととぎす山のはの　好忠

新 花の袂の夏衣たつ　経信

代 春は今日の山郭公　光俊

早夏鶯

後拾　卯の花を垣ねにうゑて夏なから〇に鶯の鳴　公誠

續　卯の花の咲くとも春のはてや鶯はまた　為忠

代　宮城野の咲る頃〇に鳴すぐしてとめて鶯の春　小町

社頭卯花

ハ　神垣にまつ葉の下葉の風にそふべき年そも皆白妙の　赤染

ハ　卯の花の色にまがへる木綿しでて夕べ神代の月とそ見れ　隆房

東忠三春花一

代　句ひつて落かし花ぞ春の散る夜の錦の葉にむすびて　不識作者

月　今こそはいとど桜の花も散らぬ春の名ぞ残るに　周防内侍

全　あまた見し花をも待ちて春の花ぞ咲きける　宇治入道

餘花

栂　夏衣きてもなほ花の名に残る花は花ぞ咲く　範兼

り　散り残る青葉の中の桜花風をさそはぬ人の枝にうつるや　道済

ハ　織りむすぶ花は風にしられぬ枝をかくる　通親

尋見餘花

月　まちわびし花をも見るやあまた日に散る風　堀河内侍

月　とはばやと思ひもよらぬ山桜夜に散る花と見えずや　実方

後京極

落花滿舟

續　ちるとても雲にまがへよ山桜散らば夕べのみやまのはしや　静圓

月　ひのへの風のさそひぬ桜も花散りぬ花の色とそ見る　大江維順女

山路落花

拾　足引の山路にちれる桜花散りかかると風ぞ吹きける　小弐為婦

除落隔川

月　かはるべき浪せかわたる桶の花は流れずや　栄重

惜花留人

全　暮ぬるに一枝残る花をそへてぬしを待ち侘ぶる　実家

遅桜

古　立ちよりて見るとも散りしみのあはれとや春の暮るる　紀貴之

物　まつことは物うき春の色にしてかくれて見る桜ぞ残る　肥後

山遅桜

金　葛城のたかまの山の遅桜をのぞみてあけぼのにそかる　定房

月　しら雲のさかりの山にかかれる桜さくらか　経清

新樹

後拾　一むらの梢の夏になる時は山の花ぞこえて　範国

金　しきてたる梢も葉に茂りければ松の翠をわかれぬ　清輔

野新樹

什　まつ野の村と見えて楢の葉広くなる夏はきならむ　康之

新樹映月

秋　庭の面は月もねぐらに木の間より漏る夏の夜を見る　白河院

全　花散りし庭の木の間も茂りあひて天てる月の影ぞまれなる　好忠

雨中木繁

新 玉柏しげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで　基俊

卯花

後 時わかずふれる雪かと見るまでに垣ねもたわにさける卯の花　読人不知

拾 神まつる宿の卯の花しろたへのみてぐらかとぞあやまたれける　貫之

金 雪とのみまがひて見ゆる卯の花はいろあれば月の影とぞ見えける　俊頼

拾遺 篠のめの菅笠さへもうの花の咲けれは月の影かとぞ見る　経信

月 神まつる卯月にさける卯の花の垣ねをぞ見る月の影とも　経家

代 神まつる卯月清みて咲く花の枝もたわわにかくる白ゆふ　空寂

全 神まつる宿のさかきの枝ごとにかけて咲ける卯の花　良印

千 夕月夜ほのめく影も卯の花の咲けるわたりはさやけかりけり　実房

有 卯の花の咲ける垣ねは夕月の月ある夜にもまがひけるかな　重保

拾 卯の花の咲けるわたりは小舟のせてまがふ白波　重保

後拾 月影を色にて咲ける卯の花はあけば有明の心ちこそすれ　読人不知

代 いづれかはそれとも見えん卯の花の咲ける垣根の月の影　拾遺

続 うの花の村々咲ける垣根をば雲まの月の影かとぞ見る　白河院

暮見卯花

花卯花

卯花似月

終夜卯花

卯花似波

後 久かたの月の影かと見えつるは里の垣根に咲ける卯の花　読人不知

後拾 白波の音せで立つと見えつるは卯の花咲ける垣根なりけり　拾遺

金 うちよする波とや見ゆる卯の花の咲ける垣根は月の影かな　慈清

秋 卯の花の咲ける垣ねのしらたへは浪のよるとぞおどろかれける　重家

拾 あまたの垣ねの卯の花は立ちかへる波かと見ゆる卯の花　忠房

垣卯花

後拾 宿の垣根に咲ける卯の花は白波の立田の河の波かとぞ見る　大弐三位

金 いづれぞと見つつ行けば山里の垣ねに咲ける卯の花　以言

卯花遮垣

全 神山の楽に咲ける卯の花はたがしめゆひし垣根なるらん　忠房

続 来て見れば立ち添ひける山里の門とぢる垣ねに咲ける卯の花　頼政

卯花隠家垣根

千 卯の花の垣ねとのみや見えつらん山里の垣ねに咲ける卯の花　相模

卯花隣家

古 世の中はいとひても山里の草木とあるまじき花の宿にぞある　敦経

卯花露毛

拾 山里の垣ねに咲ける卯の花は誰が衣うつ　読人不知

山家卯花

代 山里にとふ人なしと卯の花のさかりには立寄らまし　全

関路卯花
遠村卯花
古郷卯花
田家卯花
隣家卯花
野径卯花
卯花隠路
卯花照路
江郷卯花
水辺卯花
名所卯花

後拾
ゆきてみる人もこそあれ山里に家のまへにとさかせたる卯花 通宗

後
白たへに見ゆる垣ねの卯花のうきたる人のかくれかの 大弐三位

千
卯花のさかりにみゆる山里の垣ねのかたにかゝる白波 政平

後拾
うの花の咲るわたりは白妙の垣ねかゝれる里の垣ねと 能宣

月
たにへは夜でもみえし卯花のにほふ所や垣ねなる道 康資

金
宿の卯花の咲るころは花に似の里人そおもひすれ 忠実

続古今
わか宿の卯花のよるへはまたしらぬ細みち 実家

代
うへにかすみの花の色なる人やまつらん山里の 宗佑

続
卯花のかたみにこそは咲とおもへ 信通

代
さかりなる人やなかめん山里のかきねにさける卯花 道済

今
卯花のちらぬ限は山里のゝゝにふるへしかとそ見る 公任

後拾
見わたせば波のしがらみかけてけり卯花さける玉川の里 相模

金
うの花のさかる垣ねはかはらねと名にながれたる玉河の里 摂政

千
玉河と音にきゝしは卯花の露にかざれる名にこそありけれ 入道法親王

卯花未遍
林間卯花
卯花盛開
卯花似雪 同 二
卯花当垣
社頭卯花
葵

千
まだきより咲るかきねの卯花はひと本のまた月のこちちるゆえに 親輔

月
夜ふかきに咲る垣ねの卯花も音するかはのせにのみしもふる 有安

代
明日山林の木の間の卯花はゆふつくよかけてさかせる 顕輔

金
卯花の青葉もしらぬ色に咲ぬればなほ雪とのみ見ゆる道まで 定長

代
うきよにはかくれかの軒のこれやこのまたはぬれにけり 文道

後拾
里ごとにおなじ卯花にみえしかども人にしられぬ道のか 為冊

白
雪のみとおもひて咲る卯花はみえてや人にしらるゝ 中務

千
みえてかよへる人しなかりけり卯花のさかる垣ねのたまがはの里 季通

拾
神祭る卯月にさかる卯花はしろくもまがひてゆかしかるらん 美作

千
あふひ草照日は神の心にもかげさすかたに先なびくらん 兼光

新
いかなれば神の山のあふひ草年をふれども二葉なるらん 小侍従

勅
ちはやぶる賀茂の卯月になりにけりいざうち群れて葵かざさん 読人不知

代
人を待ちつゝ宿のそとに振りこのまにあふひたのみ 為定

拾遺
ちはやぶる加茂の社のあふひ草ふたゝびかざす神のしるし 後撰

揷ノ葵

葵述懐

寄葵懐旧

和哥五首

代 いまてれどうぎとあふひ草かずならぬ神にはかゝる名の宿り　為家

勅 うきそれるその神山のもろ人とともにあふひのかけてさしける　雅経

續 くさかれにかけてゆふしで神の御前にあふひ草　実氏

代 そのかみのとはれぬもかな葵草名をのみ残す身ぞかなしき　經衡

同 さ人のうき涙葵は千早振神のみまへにあふや宿り　肥後

今 未通女子がゆふかけのこの葵ともにあふひまちやせむ　家隆

新 見ればいとゞ涙もろかづらいにしへかけてかへる年　長明

千 神山の榊にまれし葵草かけてこそ祈りし　式子内親王

勅 哉くらき中のかざしにあふせ草年のめぐりに　後徳大寺

六 わが世にかけてし袖子早振るその川波のたちかへりつゝ　為氏

代 人に告ぐる千早振る神のまへにあふひや　同

古 夜はまだ郭公の我がかたにきこえせぞ　輔尹

今 郭公こそ涙かくれね子規ゆかしき郭公　読人不知

郭公

暮郭公

日ゝ郭公

後 峰まだねいづらりせ杜鵑花の名にはすれし　読人不知

拾 まだ袖にひきそへて深き花橘の枝に峰ながき　躬恒

後拾 郭公たづねばさそふ道にゆくての浅ぎ待ちつゝ　伊勢大輔

金 みな山人ものかへる里ずれね子規ふたゝびの声音の絶　顕季

代 いざゝらば涙くらべむ杜宇われもなく音のかなしきに　雅縁

今 ゆきやらで山路くらしつ郭公今ひと声のきかまほしさに　公忠

新古今 見し人の山路に鳴きしことしをもまたやかへらぬ　以仁親王式部

日 なき名たつ涙の杜鵑きゝし袖の夜ぞ　業綱

日 ほとゝぎす声もまださぬ都にはかひなき子規　雅国

万 家にありて何か思はむ子規一声きかぬ年　廣縄

新古今 杜宇深山のはつ音の卯の花ちるをかさねては　よみ人しらず

後拾 ちらぬ宿の花にそへて鳴きて君が待つ　堀河

金 子規まつ夜ぞぶかに声をかへしけり　待賢門院安芸

同 ふたゝび文字郭公いかぞ関路にまつらん　範信

引友聞郭公
旅人聞郭公
聞郭公待郭公
聞夜郭公

待郭公

[illegible] 道因

[illegible] 小侍従

[illegible] 西行

[illegible] 俊頼

[illegible] 志貴皇子

[illegible] 宣令

[illegible] よみ人しらず

[illegible] 伊勢

[illegible] 明衡

[illegible] 季貞

[illegible] 定長

[illegible] 法性寺

[illegible] 信円

[illegible] 経信

[illegible] 六条

[illegible] 延光

久待郭公

[illegible] 法性寺入道

名所待郭公
邑待郭公
夢々待子規
月中待郭公
夕待郭公
夜待郭公
閨花待郭公
郭公稀待有
對月待郭公

郭公まださなかなる一家の花橘の実になるまでも　実ね

まつ夜まさきまくと思へど寝ぬよはねぬと残る夜嫉しかりけり　昌俊

郭公ひとこゑはいつのこの子規を待うちとけて　実よお

杜宇その名の山の梢のかへるかりけり待し人ハなきや　二条院

宗代のまつ小島せね郭公いつ打とけてなんとすらむ　康頼

今年覚ゆ出る初声を郭公をかハるさで一家かきのよ　荘山院

夜ハまた所にきまく鳴杜鵑くれ待かども定めなき世に　範兼

かれねべきよ夕べの雲間杜宇しまたれんとそやまさらん　九条

夜のまつれ待れる郭公を思ひまてねむれ待ねまた　中務

秋わけふかく待ばやしても杜鵑いはふ山の峰に帰らで　紫範

鳴くどもうち過ぬ一声郭公来れと郭公待まつ人を頼つまらぬ　雅俊

夜のまつ夜のはまじ涙わすもむかし一声すぐら　家言

月をちはて待ぞらむ子規み山出ん声を聞まで　公任

むかしの月ハまつ夜に出わればとなくや山の花郭公きけれ　親家

深花待郭公
終夜待郭公
暁待郭公
待郭公空明
連夜待郭公

有明の月ねざめし夜のこゑ月ハ山かげぞと待夜すぐらして　摂政

杜鵑なかるさ里に杜鵑声ぞまちわぬるさやすまけるは　良人名

又月を見ていさ夜の子規声ぞめかむ杜鵑声をまちわびて　後九

代いで山出て初杜鵑待ハ夜公鳥のふく時の一家名にすむ　正方

杜宇なく山やまね杜鵑に思ひをかなしきほとゝぎす　兼輔

深きさま覆ふハ久しき夜の名残ねに鳴待と待かひなき　以通

又まぎさも子わけ浜夜のうち萩の葉も人ハ見るも　院中納

代わがやどら待ちわびてほとゝぎす浜あかの声に又みよるらん　博雅

待侘て小萩の宿にて子規暁過ぬ月はさらぬ宿の　左衛

あやなやそまぢ夜に聞せぞ杜鵑初音ハとるよし少なき　遠光

郭公名もねの宵のなごりいまだぬる一声わかつ待をさ　雅明

名のみく夜すぐら杜宇まつ夜の明のなる声なり　六條

幾夜さそふ夜ぞ杜宇子規来ぬ小夜ふかき数待れバ　内大臣

いつぞ我よりさせん郭公待夜すがら小夜のうち　為遠

安花待郭公て
雨中待郭公て
旅人待郭公て
老人待郭公公
池待郭公
家々待郭公公
後花待郭公て
常待郭公て
社頭待郭公て
里待郭公公
本郷待郭公公

代 枝かはすまつハたぞ子規いくよる里にありてなくらん 河内
月 杜鵑まつに待ぬる数ぐらすぎゆく朝ののきまで 信通
勅 いふせんたねくわする郭公まざしと云へば村雨の空 為経
月 夜にて待る夕暮のまちぬるこそ恋しのひくらす 師光
代 あらくの七年もさひえも及び出すらね杜宇うれ 為性
合 まいねれべ待べきことよもされねぬふるはつ音に初声 資隆
代 おさく人は君物待子規おいを残すなの声ならぬ声 資忠
月 我ものまかせて杜宇まびかすべくぞるらし 弁侍
勅 まづ里をとひてぞなくと郭公のまつらむ言ぞ待ずし 紫式部
代 待つかぬ君ぞ久しき杜鵑いまだ初音をきそ帰らむ 惟明親王
後撰 たちねる鳴くきさらぬ花の名を待ちてなく声をかな 寂蓮
代 夜ふかき年の声まにあかずよりそもまちつる杜鵑 定家
合 まちかねて人かはなれん此里にまだ鳴きしよ山深く里茂 法性寺入道
勅 子規こそ君くらすまでの花橘りさきさきつくる頃 家隆

山中待郭公て
山家待郭公公
對森待子規
對卯花待郭公て
對花橘待郭公公
未聞郭公公
五月未聞郭公
待時郭公公

代 深く山まてもなで子規なくしやまぬらなにかなくらん 前大僧正
続 山里のかひそまれ杜鵑をまちて人をまちまつらん 道命
代 おとせんとさいのなの杜宇田子のうら藤今さらに 家隆
合 神まつる卯月の花を咲かなら山ほととぎすなくらむ 讃岐
月 橘の花ちさらと共にあら山郭公初声まつらむ 長能
たきく 神の香の花に若ん絶え公まちとる待ても昔とらなく 定家
後撰 橘ぞとふも尋人をまれ杜鵑まちかきうぐひすの声 兼之
後撰 杜鵑なれハまちぞぞなるらむとのつまでくまちなれで 慈範
金 いまさとまりなく郭公またまつのなれとといふ 実り
月 子規まちなら待ちぬ人よらへと聞きも杜鵑まつらん 頼宗
代 よすがも杜鵑のさ月ぞ郭公まれゆくぞねまくのまちと 忠良
同 杜宇郭公まちもぞかくのまちもふわくまちまつてと知り 隆光
後撰 杜宇こそ郭ふるねざし杜鵑の待もまちぞ一声ならむ 小弁
詞 まつ杜ハねまくそまち郭公まちぬ夜のはつ声 公教

更待郭公

人傳郭公

初郭公

[illegible]

花園左大臣

[illegible]

[illegible]

法性寺入道

[illegible]

讀人不知

[illegible]

聞郭公

古 くるゝかと見れハあけぬる夏の夜をあかすとや鳴山ほとゝきす　忠岑

後拾 杜鵑夜ふかき声を聞のみそ物思ふ人のとり所なる　花山△

千 一声ハさやかに鳴て子規雲路遥に遠さかるなり　頼政

新 卯の花の垣根ならねと杜鵑月の桂のかけに鳴なり　良経

今 郭公花橘に風過て山郭公雲に鳴なり　後鳥羽

有 ゆかしさに稲葉ハ聞の郭公清しめぬる老の子さなか　家隆

新 ほとゝきす聞つとハ月まつといふかひも猶人そなき　和泉式部

代 もろともに待つる人ハあのかつら子規先そ鳴つる　下野

月 ひとりハ寝と成まつ郭公聞たねん人も先ハ聞けり　能因△

暁聞郭公

後拾 枕にもなくなるさきの杜宇あけほのの声にそ有ける　藤原

代 さゝかき更て一声小郭公人の心は嵐くもりける　読人不知

遠聞郭公

六 足曳の山の遠方なれハすくかけきと声をきゝけり　頼政

金 待人の旅ハけしそ杜鵑さかしは帰てなくなる　兼仲

有 子規まちに帰て色なれと声ハかたにさまよふまゝ　家隆

路聞郭公

有 子規鳴ならす声を遠く山ふかき人を

代 杜鵑まちける声ハ人の心にさそふ事に来にけれ　範兼△

今 いつくにか鳴ける郭公まちをるさに杜鵑あらはれぬ　よみ人しらす

千 郭もるく声もしきまく杜宇ね次に音羽山まてこえん　周防内侍

拾 峯つゝき人ハまたねぬ郭公橘卯の花の陰に鳴まて　良通

雨中聞郭公

代 卯花の垣ならねとも郭公鳴をふもの杜宇鳴なり　人麿

有 ゆふやみにまたき声きく晴のまに杜鵑なり　後鳥羽院

金 杜宇鳴のめく声ハいつこと聞ほとはつの雲の上　基方

郭公何方

代 小萩まて訪さめ声ハ杜鵑すく聞る声ハいつく成らん　女王母

有 いつくそとたまに杜宇今一声の人もなきさ　行信

年々聞郭公

六 昔より鳴と聞けと杜鵑声いつのせかの山にそ有る　長仲

金 年ことに鳴とハきけと杜鵑まちかねていかて猶ある　経忠

有 古ことに声なきぬる郭公さ夜の声にまつる拝　読人不知

続 もしことに年をへて鳴郭公花橘も花まちにハあらまし　兼光

　　　ちかこといつとしらんとする子規昔の声ハかはらさりけり　行尉

終日啼郭公

日々啼郭公

夕啼郭公

暮々啼郭公

夜啼郭公

代 山路とめて待そおもひし日をくらし鳴まてそ来ぬるかな　蘇慈

仝 聞かはやと思ひし郭公人よりさきに峰にてそ聞　孝標女

後 いかにいはむ夕月夜ならてたえすねぬ日なき　よみ人しらず

拾 あしひきの山郭公里なれてたそかれ時に名のりすらしも　輔親

代 ほとゝきすいつちのかたにかたらひて鳴と聞　仲実

同 杉の戸をさしても郭公のみ思ひやる人はたれ　経政

同 夕月をまちけん時の子規なのりてそきこゆる　小命婦

千 里なれて待けん時の杜宇しはし鳴なむ　西行

代 郭公暁の山の月のそらに鳴て過ぬる　守覚聖

古 夏山になく郭公の声にまたるゝ　伊勢

仝 夕月夜郭公ひとこゑのみそきゝつる　友則

拾 いつとなく郭公鳴ていつかたの空　柿本丸

代 郭公ねさめてきけはいつちへか　読人不知

　　　元真

連夜聞郭公

ヨガレノ
隔夜郭公

聞初啼郭公

涼夜郭公

隠和郭公

終夜啼郭公

仝 郭公の声は郭公まちわひぬれ　小辨

新 まちわひし郭公の声をきくほとに　大武丞

勅 ちかくなきて花橘の枕にかをる　公経

続 軍ては郭公いつかはなかん　康資王母

月 郭公の根はなれて鳴　仁和寺宮

拾 さ月雨の郭公まちて鳴　家隆

代 此頃はよはの空に郭公　為忠

古 鳴かれてまたさひしき郭公　読人不知

自 郭公我そらにかへる夜半の人　勝覚

同 夏の夜は郭公の声　敦経

代 まちわひて郭公の声　高遠

古 杜鵑夜のまゝに月の夜郭公　伊勢

　五月雨の空にも杜宇鳴かひて　業平

月前郭公

万 ゆふさて暁月に浮えて鳴郭公きくがまなし 家持

後 卯花のさかりなる垣根の月きよみい寝ずきけとや鳴郭公 読人しらず

金 杜鵑雲の絶まにいさよふ月の影にも鳴わたるかな 式部

千 夕月夜雲の絶まを月さして郭公空に鳴なるや 実保

代 月夜にはわかずとぞ思ふ杜鵑いとなく鳴わたるかな 為氏

夜中時郭公

月 郭公夜ふかくや鳴一声はおどろく斗うれしかりけり 定佐

月 心ありて夜の夜ふかくこそ杜鵑人はよそにてうつりゆくらん 光綱

続 子規まつ夜の鳴つるかなさは夜ふかくはなかりけり 太政大臣

代 うつつともなき夜の夜ふかき杜宇おどろく枕にたてきこえぬ 六条

郭公幾声

金 いくたびとなくまつせば郭公ひとこゑきかぬほどぞ明ぬる 公実

郭公驚眠

続 鳴さてまどろまぬ夜半も人ぞきく杜鵑の声 永実

千 まどろまぬ夜半ぞきく子規声は枕にさだめてくる 俊成

寝覚郭公

月 寝ざめする夜はにきけば郭公ほのかなる声のみぞ鳴 通秋

代 よそにて聞郭公あかずともなし寝覚の夜の声 為尚

暁月時郭公

勅 郭公と散らんかげさ月のこの夜のありあけ 後京極

続 杜鵑まつ夜のさまに鳴音はふけてあけかたの月のかげにぞ聞ける 仲実

万 暁に名のり鳴なる杜宇いやめづらしくおもほゆるかな 家持

暁郭公

後 子規暁がたのひと声はうき世の中をすぐす成けり よみ人しらず

拾 足引の山出て夜をやさしくる郭公暁かけて声の聞ゆる 兼盛

詞 杜宇暁かけて鳴声はまだねぬ寝覚の人やきくらん 伊勢

万 旅人もいまは寝ぬらし郭公しのばぬ声のきこえくるかな 不知詠者

代 鳴つくせとはやさせば郭公暁ごろの声になくなり 公権

喚杜鵑

月 いつれ共しらぬ人まつ郭公鳴や雲の彼方にぞ聞 勝命

勅 郭公雲のこなたにすぎぬなり夜ふかくなるる暁の空 後徳大寺

寐時郭公

後 まどろまで聞ゆるなどの杜鵑まだ二声も鳴てきつらん 読人不知

後拾 夢のうちにまどろむ子規鳴てきゝつる夜をかせば 資実

金 つぎすこに逢坂山の杜宇鳴わたる空にかへるや 定信

続 きのふ夢はきかりし声は郭公すずろにきくも鳴わたる 影廣

郭公一声

後 二声と聞とはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな　以文

後拾 有明の月だにあれや子規たゞ一声の行かたもみむ　宇治前太政大臣

金 聞てしもなほぞねられぬ郭公待し夜ごろの心ならひに　赤染

千 二声ときかずはいでじ郭公いく夜あかしのとまりなりとも　道経

新 杜鵑一声鳴ていぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる　家持

月 きゝつともきかずともなく杜鵑心まどはす小夜の一声　相模

月 二声と鳴つときかば郭公衣かたしきうたゝねはせじ　経信

新 杜鵑まくせさ月のまつほど二声そわくら秋もぐれ　雅経

月 一声と待つるよはなかく夏の夜ながきねざめのつゆや　行家

続 一声とまどふるまくねて子規きゝつらむよはのねざめに　基俊

郭公声稀

金 此夜こそ郭公いづくも初音のかはるらん　永縁

詞 ひと声もいかゞ鳴覧杜鵑きゝし計はあらじとぞおもふ　忠通

後拾 同じくはなきてもゆかむ杜鵑またれて後の夜半の一声　伊勢大輔

纔聞郭公

月 いづことかたぶにはまて郭公たゞ一声のたまきはる　赤染

千 あてもなくきゝわびぬ子規人まつのはる秋のひとこゑ　教長

拾遺 杜鵑いつもしられぬ一声にしのゝめの空をなにゝたとへむ　公光

勅 子規鳴つるまよふ五月雨の雲のかよひぢのひとこゑ　慈円

千 思ひ出る心もしらじいにしへの声もきこえぬ人のふるさと　忠良

思寄郭公

詞 きのふこそたゆまずなけ郭公われのみときかぬ人ぞまたるゝ　小弁

金 まてしばし卯花夜まで小野の一声きゝつべき杜鵑か　院御製

千 人ぞつてつる杜鵑なのめくもなく村雨のそら　長方

郭公声遥

金 子規あまた聞つる声こそはゆかしかりけり　顕輔

新 杜鵑雲井のよそに過ぬなり晴ぬおもひの五月雨のころ　太上天皇

郭公未遍

勅 さくらみし郭公名のりしてこそ九重のほとりとぞ聞　以り

続 夜の程はわくるもしらで郭公鳴て過ぬる宮城野の原　中院入道

郭公早過

千 過ぬるか夜半のねざめの郭公声はまくらにある心ちして　家隆

千 杜鵑鳴つるかたをながむればたゞ有明の月ぞ残れる　右大臣

月 聞ずとてまちぞねぬ郭公心のまゝにひとりつくる　顕輔

郭公未飽

続 杜鵑きく一声にあくがれてさらぬねざめぞ多かりける　家俊

代 ゆく人はわがふるさとに杉の声は鳴きそへり郭公られ　長時

月 子規まてひとこゑもまださかしやあかぬ名残の声はきかなん　覚忠

万 杜宇きぬれどわが網なくにそれをまづとく告げよ　家持

仝 玉にぬくあやめは宿に植ゑてむ山郭公かれどもあらんか　書持

月 五月山卯花ばかりにかくれなばわれぞ又まねかる　作者不知

古 郭公声ききつるもわれのあかぬのかぎりなければ　友則

金 子規一声鳴きて行くものをなにをかつくるのみかは　公通

勅 しばしやかしてひとくせ郭公まづ鳴くのさ月になきや　為家

代 杜鵑まだ鳴く山のあひだにつくるまでもわが待たれし　重時

郭公未遍

郭公遍し

仝 いさとはゞ鳴くなる物は子規いづくもおなじ五月ときの声　仁和入道

勅 故里もまだ鳴かん杜宇こゑ末の五月雨の声　俊頼

代 いかが里にたれか待つらん子規夜はの寝覚をいかにとまれると　和泉式部

月 宿ことにまたれしのべは杜鵑きゝ初めしこそ待たれし　相模

名所郭公

郭公所々

郭公声頻り

郭公飛声

郭公稀なり

待不聞郭公

代 おきてまつひあけそわがごとにこひつる郭公かな　信濃

古 子規ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから　読人不知

仝 あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく　みつね

拾 夜くれば深草山の杜宇まく声さゞく来鳴るかな　仝

代 夕ぐれ日入ればなどの山のはにさゝらえの嶋郭公かな　通孝

月 ちぎりけむとへば子規あかぬ名残の夕やみの空　元方

仝 あかずなく其ほかもあれどの杜宇鳴かずてなほ又月夜の空　為家

金 杜鵑なれが鳴く声は山彦の声にのみこたへきこえける　雅定

代 夜ふかき山里なれど郭公声は惜しくもまだ聞こえずや　兼昌

月 郭公なれきく声は時とふきそふ人を待つ鳴く身　富山院

続 まだまたぬ坂の郭公何かいへる松まつらず　忠通

新 杜宇まだ声きかず郭公人にまつこそ待ちわびつるの　白川院

続 きかずしや山郭公一声もまたこのむる人すらしは　小左近

代 たとへ声もなき山里にこそあらぬ人ぞまたず　為尹

樹中郭公

池中郭公

郭公如旧

寺外郭公

雨中郭公

代 鶉ゐる宿の庭に杜鵑わくら梢にまちくるゝ　時昌

六 おとせすハいかにかれ絲ハ林の末に待ぞくやしき　読人不知

後拾 ゆふ暮ハ杪音なし子規鳴ハ林ぞゆかしき　忠命

新 杜鵑青葉ひとしほさめの夜半に一声ぞする　顕昭

代 つらなりて聞としもなき杜若ハれぬるの待れ給ハ　頼輔

古 いそのかみ夜鳴つらんも子規ふるき都のつらね　読人不知

代 郭公くらしね声ぞ待ちかねて木のまくらふかいの林覚えて　紫宗

新 一声ハ思ひぞあへぬ郭公たそかれ時の雲のまよひに　高倉

千 心なる人をはきね子規その夜の空のならふにしも　実宗

新 夜をかさね待かね山の郭公雲ゐのよそに一声ぞ吟　周防内侍

代 きゝわたし鳴やいづく杜鵑遠山の遠にこゝろ　摂政

拾 子規どこ入りまくらなる子がすれ蟹のさみだれのそら　美作

月 とゞめかねまよふ山の郭公いさゝ晴れに声すなり　長光

金 杜鵑雲路にまよふ声すなりをやみだにせよ五月雨の空　経信

雨後郭公

山郭公

拾 ゆふづくひかるき嵐に島の歳日もはなれ月雨の空　資実

新 声ハして雲路にむせぶ郭公涙やそゝく宵の村雨　式子内親王

勅 さみだれハあやなぞそゝる郭公夜ぶかく鳴ける音の村雨　有携

代 幾とせか待てし杜鵑神なび山の五月雨の空　家隆

月 世にはのもとにほのかに語り子規幾やさへずりの夜　忠良

新 五月雨の雲まの月のはれゆくをしばしまちける郭公かな　讃岐

代 五月雨の晴まの雲れにしばし山ほとゝぎす一声ぞ鳴　摂政

古 思ひいづるときはの山の郭公からくれなゐのふりいでてぞなく　讀人不知

拾 夏山に恋しき人や入にけん声ふりたてゝ鳴杜鵑　紀秋岑

拾 都人ねてまつらめや子規いまぞ山べを鳴て出なる　右大将道綱母

詞 山ざとのさつきの杜鵑一声すてハ二声ぞきく　能因

新 おのが妻恋つゝなくや五月やみ神なび山の山郭公　よミ人しらず

代 五月闇しげきにまよひて杜鵑おとはの山の山に鳴らん　定房

今 うち忍びこの山の郭公うれしきこゑの初声　ゑとゝせし

裏ノ十六

重郭公　杜鵑出る引山の雲々

郭公出山
山路郭公
夢中郭公
枕上郭公
林子規
森郭公
岡杜鵑
野郭公
旅中郭公

新 杜鵑なれし深山を出しよりその里になれぬる声の聞ゆる　あり▲

月 五月雨の月はつれなき深山よりひとりも出る郭公かな　定家

拾 行やらで山路くらしつ郭公今一声のきかまほしさに　公忠

千 風越ゆる峰のあなたよりも聞えくれは子規窓の中の夜半にきくや　清輔

月 夢の中に月秋入さの山のはにまたくらぬにや郭公なく　宗家

代 さつきやみくれはし山の杜宇ひとこゑくらき夜半のをちかた　信実

新 おのかさつき篠田の森の子規ねぐらの森を立出ぬ也　保季

勅 さみだれ里は森の木の杜鵑この一声を待にかひある　よみ人しらず

万 森の下のさしまに人をまつ程の岡に鳴なる郭公　仝

続 杜宇たれかまちきて杜宇あたりの野に鳴くこゑそ聞ゆ　隆資

万 さをしかのなる野辺の杜に郭公鳴声きけは里なれにけり　従三位大輔

古 郭公峰の雲にやまじりにし有とは聞ど見るよしもなき　読人しらず

後拾 東路のさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけん　是則

月 都出て旅の空なる杜鵑一声ゆかし坂の関に鳴也　躬恒

代 旅ねしてきかはいかゞん子規草のまくらの夜半の一声　入道前摂政

仝 里なれぬ山郭公はうたゝねに都の人の夢もおどろかせね　宇治入道前

拾 杜鵑旅ゆくすゑにかたらふ草の枕ぞよそに聞ゆる　以忠

月 ゆくねぐら都恋しき夢に涙の杜宇なれ　勝命▲

後拾 草枕その夜の夢に郭公きこしめしての物語かな　増基▲

千 逢坂の山郭公なのるなり関もる神や空にとふらむ　師時

月 あしがらの関の杜鵑声たてゝうちわたりの関まもり　資保

新 二声と聞こそは出ず子規幾夜明石のとまり成らば　通

金 声のあつかさ波のまにまにきこゆれば子規　匡房

金 峰わたる浦ぞ舟まで郭公我かよふ舟のまにまに　高真 真イ

拾 あかしの子をも待せよ杜鵑声のかなしと人ぞいふ　躬恒

金 浦浦の舟には郭公鳴てを杜とまりや宿れ　康資王母

拾 いづこにか鳴てふ浪の杜宇浪のうへにも声ぞまじれる　忠見

金 杜鵑鳴への水に影うつる夏の夜ふかきかたにぞある　摂政

河上郭公
江上聞郭公
名所郭公
社頭郭公
寄秋祝杜鵑
古寺子規
古郷郭公

代 ちかく笹浪よるのへつ小川之渡のわたりの村雨の空　後京極摂政
続 ことのえに鳴てとほるや子規まつにひあるかな社なれ　定家
今 鳴声ハ高まの山の杜鵑ならの里の人きくらん　雅経
代 さ月闇神なびの杜のかたく夏の書なきもらし鳴ほとゝぎす　鎌倉右大臣
勅 すぎ行日のゝ声の縄ならむしめし御神の杜鵑なけ　為家
六 子早振神の社のおのれにて遠きつる子規かな　読人不知
代 杜宮二騎の神杖見えでさきなれ語はかなむ　後久我太政大臣
今 神まつる卯月の子規なれは物部ばかりものゝ都　慈鎮
日 神垣やよも津の山の杜鵑とはいまぞきみの声ばかりぞや　法性寺入道
続 いまぞ山鶏やきなる杜宮かみたそ杜鵑はつる声　雅実
千 すぎかへしものかた物なん我公宮なるの山の清の声かは　家持
男 香小きしまの杜はなかなかでもと子規すぎもあかぬ　経信
古 ふるさとなる都の郭公けふかこそ鳴しやさまし　忠岑
日 むかしへやとぶ立まさる郭公なれかしもうつきまえらん

古寺郭公
樹中子規
里郭公
山家郭公
田家郭公
禾中郭公

続 かるゝ峰寺の入まにさぞへ杜鵑まれと昔ばなつかしてすめ　仁和寺宮
勅 あかれかなる法の声に我公かな待とふ御坂のところにて近　長方
続 杜宇森のよりてゆ時を緑葉にちり帰つてらき待れ　行宗
拾 いつ垣をかけて程ハ郭公まだ知らぬのそまでにて方々　季貞
後拾 式郷かいまる人かきちて山かくし笑次歌ぞなら声　以ちか
代 家若の垣の日をそほとゝ宜といはまの里の間ど知起　元真
今 郭公まだ鳴さなで一声の尾の村家のそらし　宗家
拾 夏山のすゞ笹ちぞ子規里かののみすご帰るらせ　美以羽
後拾 山びとの人は見ぞ杜鵑是あら哉木のうのみぞきく　是則
新 小里かやがらせば郭公時人もきく程ぞ夏さ海し　読人不知
古 小笹吹まぞの杜鵑のよ田ぞう小鳴杜宇なれ　後徳大寺
朝 いくさの田ばはるれぞ郭公までの里はさと鳴なくなぶ　敏行
新 鳴つる辻かすふ暮子規うげらか小人しまかれど　後撰
　 昔へ一葉の庵のなる山の風小渡すさへ時山かく笹そ　俊頼

子規鳴橘

後 見えねど花橘にかをる夕暮ぞ待ちせる声ききつる 読人不知
古 たれしかも花とちるらむ子規花橘のかをる夜ね 興風
新 杜鵑花橘のかをりとめて鳴くは昔の人や恋しき 読人不知
代 ほととぎすなくや卯月のそれはこれに夜なるらん 和泉式部
同 打とけて鳴かずは郭公卯月のころそまたれけれ 堀川右大臣
代 今はただ峰をぞ時ぞ杜宇こぞの五月の名こそなりけれ 登蓮
物 いづくのまにまに里あれぬらん杜鵑又月の比やとて 行宗
代 里わかず鳴くや五月の郭公思ひいづらば根もとせし 小弁
後 あやしの山杜鵑ふたこゑまでも鳴くやうかれぬ 延喜御製
物 家ふしにたてふくせ子規五月のまぢかきにはなる 祐盛
千 五月雨の二村山の杜鵑峰ながらにも声はかすかに 俊忠
新 たづね来て聞かまし月のいつか又声きくべき時 国信
物 かくしも又さきだつ子規又月まちて待ちわびつる 俊頼
新 まつ心りの中ぞ郭公鳴きもしや来るかの宿 師時

郭公欲帰山

代 五月雨の月さまよへば郭公めづらしき声ぞおとなしき 能因
古 ときはなる山の峰まれ杜鵑声の限りは家ぞこひしく みつね
今 夜をこめて山郭公ことしさへ雲の中に待ちぞわびぬる 三国町
後 夜もすがら鳴きて帰る子規そなたの空に何をなげく 読人不知
新 杜鵑鳴きていづこの山の端に月とともにかへるらん 前太政
物 郭公ゆくもなつかしき山の端に入りし宿の夜の 俊綱
代 子規山の端に入る声すらも名残は鳴く声ぞ 周防内侍

更聞郭公

古 さかりせし花橘もちりぬまで郭公声も聞かぬ 千里
今 いさ又鳥物思ふ宿ばかり帰りて来ねて鳴く 兼盛
同 杜宇我とはすれど卯花のうき世の中に鳴きわたるらん 美作
拾 来つれてもいく杜鵑なきぬる人のみぞ 家持
郭公懐旧
詞 郭公鳴く声きけば世の中はまだおさまらぬ我が身や 忠岑
今 昔にもあらぬ我が身に杜鵑ふるさととても音ぞなく 周防内侍
新 かくてのみいつまで時を待つ宿の昔の声 花光

郭公増述懐
寄郭公懐舊
簷橘
植橘
盧橘初開
花橘盛
簷橘薫風二
雨中花橘

後拾 一声はさやかになきて郭公とをにまくらとなみになるゝ 長済
月 世中はうき月の光に郭公こゑをもおしみ思ひふかく ヽ朝
古 五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする 読人不知
後 いまの世に住(?)ける人のかたみとや花橘ぞむかしがほなる 仝
詞 宿ちかく花橘はほり植じ昔を恋ふるつまとなりけり 花山院
千 それならぬ花橘の匂ひにもなをたちかへる袖はたえまなれど 皇太后宮大夫俊成
万 風にちる花橘を袖にうけて君がみ跡と思ひつるかも 不知読人
代 植をけば花橘し匂ふとも見ぬ昔の袖とものかは 忠良
新 ことしより花咲そむる橘のいかで昔の香に匂ふらん 家隆
千 我宿の花橘にふくかぜはたが里までとかをりそふらむ 顕宗
詞 五月やみ花橘に吹風はたが里までか匂ひゆくらむ 良暹
仝 宿ごとに花橘ぞ匂ひける一本さそふ風はふけども ヽ実
後拾 五月雨の空なつかしく匂ふかな花橘に風や吹らん 相模
千 浮雲のいさよふ宵の村雨に追風しるく匂ふ橘 家基

夕簷橘
夜盧橘
雨後簷橘
橘薫
盧橘薫袖二
花橘薫枕二
橘遠薫
禁庭橘
故郷橘

新 ゆくすゑは遠くとも夕なぎに[illegible] 通具
代 郭公なかしてよりもちかき里のゆふぐれの空 後鳥羽院
金 五月闇花橘の在かをば風のつてにぞ空にしりける 俊忠
新 さつき花を短き夜もの袖に花橘の袖にとゞめし 慈円
月 橘の匂ふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香ぞする 俊成女
千 五月雨に花橘のかをる夜は月澄秋もさもあらばあれ 崇徳院
月 うつゝなき花橘のにほひにぞ寝覚の[illegible] 忠盛
千 風にちる花橘に袖しめて我思ふいもが手枕にせむ 基俊
代 まつべき人をまたれの衣手に花橘のうつりかぞする 永縁
千 折しもあれ花橘のかほるかな昔をみつる夢の枕に ヽ衡
月 故里の花ちらばさそひきて我袖かけよ風のかよひぢ 廣言
新 [illegible] 内大臣
代 年をへて[illegible]橘 衣笠内大臣
新 尋ぬべき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭の橘 読人不知

簷前橘
依橘客来
折橘
橘移香
隣家橘再懐
寄橘祝
寄橘懐旧

代 橘の袖のかをりもそのまゝにむかしをしのぶ花ぞかほれる　定家
自 わがやどの花たちばなに吹風は枝にかはらぬ香こそにほへ　經正
代 まちかねし人を昔のわが宿の花橘のにほふさとかな　少将
新 杜鵑なきていづこにかよふらむ花橘の宿にしらねば　師賢
代 昔思ふ花橘のかをる夜は今かとのみぞ待たれける袖ぞぬれけり　師季
今 さつき待つ花橘のかをかげば昔の人の袖の香ぞする　六条家
後拾 それとなく花橘のかほらぬは誰が袖ふれしにほひなるらむ　高遠
代 ちらで見し昔の袖の香にさえて花橘の露ぞこぼるゝ　忠家
月 橘の袖にかをりてしのぶれば昔ぞいまに思ひ出ける　大江匡房
新 おほけなく君をしもふ橘の花ちるさとの月ぞすみける　家持
新古 かきつくる橘の花のいろかをも君にしられむ時をこそまて　柿本人丸
新 涙そふ橘の花にしのぶ世をむかしの人とおもはざりけれ　後鳥羽
代 もろともに花橘のにほふ夜をいかに寄る袖のかをかさぬらむ　土御門院
新 いとゞしく昔をしのぶ橘のかをる袖ぞぬれける　忠家

楝花（アフチ）

早苗
採早苗
里早苗
山田早苗
山畦早苗
隔遠早苗
遠早苗
近早苗
名所早苗

新 あふちさく外面の木陰露おちて五月雨はるゝ風わたるなり　忠良
六 つれなくもあふちの花は咲ぬれど宿にしらねば人ぞまつなる　貫之
代 秋せまるいつとかひなくあふちの花は咲にけるかな　中務
後拾 五月雨は日数ふれどもしるしなく早苗とりにやかへるらむ　好忠
六 早苗とる田子のいそぐは五月雨の空にまかせて田ごとにぞする　貫之
代 早苗とる山田の水のひまもなく今日ぞ見るべき花の色かな　匡房
今 今はまた早苗のとるか昔よりいそぐさかりの田子ぞまつなる　基氏
月 時くればいつしかとりし山田の早苗にさそふ雨ぞふる　仲実
新 あし曳の山下水のしげゝれば早苗の田井に早苗とるなり　野宮左大臣
代 早苗とる山田のかけひもりにけり引なる縄にかゝる白露　經信
後拾 子供等の早苗とりなる山田にはいつか秋風ふかむとすらむ　堀川右大臣
代 五月雨の晴間にうゑし早苗の遠さと山田のさなへかな　隆資
自 五月雨に田をうゑてしか山田のかげのさなへは色をましけり　資賢
代 みなせ川のながれもちかく早苗とるさつきのさ田に早苗まつらし　為家

急早苗

雨中早苗

雨後早苗

寄早苗祝

五月五日

五月五日雨

菖玉

端午述懐

月 とかくして山田のさなへいそぐなり[illegible]秋はまてぬ[illegible] 兼輔

代 まだきなる時もまつ[illegible]小田の早苗も今はとるらん 師継

月 山里は時[illegible]五月雨のとれ[illegible]さなへ[illegible]らん 家隆

仝 早苗とる[illegible]雲の[illegible]早苗[illegible] 住吉[illegible]

月 五月雨のふるに[illegible]早苗[illegible] 範綱

物 山田[illegible]早苗[illegible]君のため 内大臣

拾 [illegible]五月[illegible] 恵慶

勅 あやめ草[illegible]人のひくらめ 東三条院

玉 わかやど[illegible]あやめ草[illegible] 契之

続 [illegible]あやめ草[illegible]ならべ 実国

後拾 [illegible]五月[illegible]の[illegible]ならん 中納言

新 [illegible]ならん[illegible] 経信

後拾 世中のうきにおひたるあやめ草[illegible] 澄章

仝 [illegible]あやめ[illegible]かな 小弁

菖蒲

曳菖蒲

根合菖蒲

軒菖蒲

草菖蒲

金 [illegible]あやめ[illegible] 経信

[illegible]あやめ草[illegible] [illegible]

[illegible]あやめ[illegible] [illegible]

九 五月[illegible]あやめ草[illegible] [illegible]九

[illegible]あやめ草[illegible] 信通

月 [illegible]あやめ草[illegible] 読人不知

代 [illegible]あやめ[illegible] 忠慶

仝 [illegible]あやめ[illegible] [illegible]

拾 [illegible]あやめ草[illegible] 堀川

後拾 [illegible]あやめ草[illegible] 範宣

金 [illegible]あやめ[illegible] 輔弘

月 [illegible]あやめ草[illegible] [illegible]

付 [illegible]あやめ草[illegible] 家宗

尋ニ菖蒲ヲ
貴賤尋ニ菖蒲ヲ
毎家葺ニ菖蒲ヲ
袖上菖蒲
雨中菖蒲
名所菖蒲
沼菖蒲
江菖蒲
澤ノ菖蒲

金　あすくさのへてうかれあやめ草又月毎にくさまちて結ばれ　兼久
月　来ごとにしげるもあやめ草かへらぬ小結びもとめてぞひく　定佐
拾　人ごとにたれかとめの玉よりあやめ菖蒲の葉をしぞ薫のつらしく　よみ人しらず
続　住吉をわけのあやめくわける家けふもしらぬ人へはあらじな　よみ人しらず
六　岩ねとにふるあやめ菖蒲葉をふ淀野にあふ私はとまるらん　堀川
代　宮人のたもとに掛くる菖蒲草わけのきり月は君ぞまふく　殷富門院大輔
新　わすれめやあやめもすかし菖蒲草沼の岩垣波もこちそまた　摂政
手　又月毎にかわせくかけむ菖蒲草沼の岩垣波をこちらまて　公実
金　ゆかしきあやめ淀野にかかる桃は菖蒲にからつる　孝善
月　菖蒲草しらぬ身にもぬれぬる菖蒲草浅香の沼に生ひけん　駒
代　菖蒲草わけ小沼にこそ沼みの底の心の程はあらはるれ　良暹
続後拾　つらくまよみのさそ沼よりけるしらぬ菖蒲の○まをしられぬ　藤原実定
勅　池のまにはうるわしの菖蒲草ふ乃根もひきもとさせじと　基俊
六　あやめ草根もこれよれば淀のうきをもえぬやつらしや

池菖蒲
水边菖蒲
旅宿菖蒲
寄菖蒲述懐
寄菖蒲懐旧
梔子花（クチナシ）
笋（タカンナ）
五月雨

続　引きとる池の汀の菖蒲草しらぬ小来めくるかな　堀川
詞　さ浪の池にはる菖蒲の深き根はいつも末の絶えせじとぞ　なかしく
月　さつきまつ淀野のあやめ見えがくれてよろづ世かけていぞはしく　資隆
六　玉江くしもあやめ草まくらの床のまくらにして　隆頼
付　嫁せむ頭をとせばあやめ草淀にかけて引きよりて見ましや　家隆
金　あやめ草我がのうらにおもしろく玉江てかけぬ世をもおもむ　永縁
外　宿ふく文もやるものさし小さく乱れそまる袖のしらむ　俊成
まつうく　もしられどあやめ咲きうるねに軒にかる菖蒲にこもりて　為家
新　ならにしも遠き人にこと菖蒲を見へとわらりたき花にこ　小辨
六　菖蒲の花ぞかたはらの花咲きあへるかわら見えけり　慈円
新　玉江ぞの花にりくのとぞてまを強てばかりる又月毎の花　定家
勅　我待つ昔の日毎つるまにひまぞかれ花の乃を気の影の　資実
代　見ては世ば来ぬきうる山をせ何ひかるまぬね又月毎の沈　隆寛
月　東路やみさきのせ川にしらぬものひとるまへえぬ五月雨のころ　野宮左

朝五月雨
夕五月雨
夜五月雨
連日五月雨
五月雨久シ
山中五月雨
松五月雨
牧五月雨
野五月雨
山路五月雨

代 宮きしを吟しわたらう川瀬せハいばらく五月雨のころ　後徳大寺
附 降そむるそのゝかはらに五月雨にまだ水浅しまこもかるらん　隆祐
今 流れくるかはる五月雨に日かくれぬ杣のくれきは落からして　通俊
夕づく日蛙わかねらのまに五月雨にしめ乙ひまえる五月雨の空　俊成女
千 五月雨の日数ふれハおりはへしつくのこゑぞ聞ゆる軒の　顕輔
勅 うちはへて幾日ゝへぬる夜川のてびきの糸のさみだれの空　家長
金 五月雨の日数へわかみつのゑかる中のゆくへはるかぞ　実通
有 五月雨のをれまはすべば旅衣かさぞ重ねて折ぞしきさふ　寂平
代 河のなる夜はは浅の岩浪うつし五月雨のころ　後徳大寺
今 松人のうらねもれぬまなこにかゝるしの五月雨の頃　家隆卿
円 五月雨ハ千のうらのねをふしひろねにぬるゝきこの山に　後徳大寺
後拾 五月雨ハこゝのうすのまへにうらをひきまもらしとぞ　内大臣
今 さみだれハ見えし小篠の原もなし浅かの沼のかけのしらて　花院
続 五月雨に並高山ハ見えゆかぬ雲の上のかぞそふ　定家

川路五月雨
野路五月雨
旅行五月雨
旅宿五月雨
旅泊五月雨
山家五月雨
田家五月雨
庵五月雨
田五月雨
山田五月雨
川五月雨

代 つる浦の入江のちハあちこえて山かけにほふ五月雨のころ　尊海
有 浅みぎれかさくあからをも行くそくや山くだりしはてか　宗尚女
代 淵にすまゝぬのかはの柳濱志づえハひらねは五月雨のころ　後徳大寺
有 五月雨ふかきさまれハ衣川ころで旅の日あそふかる　輔仲
手 さみだれハ昔の泉に袖ぬれてわする志ちからぬの波のうきねを　仲正
有 五月雨に志づの志のうちしほれつゝきいきかなから　実国
同 五月雨ハいさゝ小川ば波こえて外面の小田のとしとよむる　実家
手 いとゞしく賤の庵のいぶせきに卯花くたし五月雨ぞふる　基俊
金 五月雨ハ土田の面口てもらぬ水のうら波にまかせてぞくる　実能
新 いろ斗田子のもすそもうちまそひまさきもえねは沢の五月雨　伊勢大輔
有 笛竹に絶えだるしもしをたるゝわせこえにならぬ五月雨のころ　季経
詞 を山田にし志めの縄のうちはへて朽やしぬらん五月雨の比　摂政
新 五月雨の日頃つもりに鈴鹿河八十瀬の浪ぞ声まさるなる　法部
勅 五月雨の比は名をのみながら川袖ぬれさせまし　衡

江五月雨

代 五月雨にかちよりゆきし浅瀬のあともなくひろき江川の水　光起

全 五月雨にうき州もしづむ江のうへはいづくにかよふ浪のかよひぢ　雅章

金 五月雨に玉江の芦のかりそめもみえず江の水のまさりけり　通村

物 五月雨の江のまさりてしらぬに江くもはてしなき五月雨のころ　則綾

渡五月雨

有 五月雨に入江のみぎはたえぬればふねもよそにいくよわたらん　良一

続 五月雨くらきの空もかきくらしわたりのふねのゆくへしられず　敦元

代 五月雨はこよひわたりのゆくさきもすみたえてみゆる渡しもりかな　家隆

野五月雨

日 さみだれは入江のはまの荻原にかくしほれてもさそふなるかな　阿内

橋五月雨

代 舟わたる橋のうへにかよひ路も大江の岸の五月雨のころ　元起

全 五月雨に入江の橋の浮ねたへばかけてもいはぬ人もこそしれ　三忠

金 五月雨のなかばしもさらに川まさる橋の錦木の五月雨の比　経仲

渓五月雨

代 たにのとにかよふ人しもみえぬまにいとど水まさる五月雨のころ　讃岐

池五月雨

全 岩川の岸の松かげ水まさり茂れる草も五月雨のころ　以相

有 五月雨のあふれぞまさるいけの水ほしのかげもみえず　実満

沼五月雨

金 五月雨は沼の岩がねみえてまさりぬるぞきしの浮草　資頼

手 五月雨に淀の浦まの花がつみうきてみゆれば　雅仲

洲五月雨

物 五月雨にいせの海のかりいほにかへるも浪のかはきぬ　有実

海辺五月雨

有 五月雨に海の若芽をたれもさす浪まのむかひね　以宗

全 五月雨くらきの海の塩やきもたえてけぶりもあげぬ浦の煙　堯信

五月雨舟

手 五月雨は海士のかるもの浦にとまる五月雨の舟人　安芸

有 ときもなくのりすてしふねのゆくへいづれの浦にとまるらん　為相

浦五月雨

代 かはするあまの釣舟うかべ浦に流す五月雨の雲　兼輔

日 かなくみえし浦の浜舟苦しきに波風晴ぬ五月雨の空　隆祐

水辺五月雨

詞 ともしほくむ浜の浦人わくる五月雨にぬれる袖　雅蓮

手 五月雨は焼すの煙たえつつ浦ふかみたるにほふ人を　通俊

忍腰五月雨

勅 五月雨は岸の水たえぬ浦にもかかる五月雨の比　為家

出麓五月雨

勅 峰をめぐりいくかにか裾野かけて川霧たちのぼる五月雨の空　為季

手 五月雨にくもるのもとの坂ふかき浅瀬の渡しこそかかる　俊成

五月雨晩鐘
五月雨難晴
五月雨将ニ晴
五月雨晴
五月雨述懐

五月雨懐旧

蛍

勅 五月雨に六田の淀の川柳うれこす浪や瀧のしら糸　後徳大寺
代 きのふに月みるひまぞなかりける旅寝つる五月雨の空　美作
後 五月雨にすゞめ驚せる月なればさなへもえこそとられざりけれ　あすゐめ
代 五月雨の雲の晴まは絶えて又月まつ比どの我ぞかなしき　建保御製
新 五月雨の雲の絶まを眺めてまどそらうすに月は待らし　氏良
今 あふち咲外面の木陰露落て五月雨はるゝ風わたるなり　忠良
千 いかづちもいへるべき縫人の心もしさへみだれのそら　しらゝか
新 五月雨はまやのゝきばのあまそゝぎあまりなるまでぬるゝ袖かな　俊成
勅 五月雨の頃の軒にわるゝ世にふれば袖ぞぬれける　家隆
続 五月雨の晴ぬる比の軒にしのぶとあやめかる　寛暁
代 我袖の外まさらじなあまる浪乞五月雨のころ　浄覚
千 五月雨に思ひ絶にし古への草のいほりの夜ぞのさびしさ　補仁親王
拾 しらぬるものる蛍はなきさわれば草の葉ごとにおきそゐる　健守
後拾 いかにせむ思ひ草もしげるなかをも忘れや宿れ　俊成

勅 鳴声もきこえぬ虫の思ひきはしのびにもゆる蛍なりけり　高遠
千 おもひまゝさはにもえかへる蛍こそ思ひの外にまたるゝ　ゆうらか
代 さゆらぎの声もきこえぬ夏虫の思ひはよそにもえそめし蛍　定家
今 あけたてば蝉のをりはへなきくらし夜は蛍のもえこそわたれ　よ等範
六 ゆくらくれて我身しらぬ人やしらずて蛍ら　きえ人よ安
勅 草深くあれたる宿の竹の風に消えてぞ蛍や分る　おほぎしく
六 ほどとぞ思ひけるべく人見えずくはまし夜とも蛍こそとく　志賀重は
千 暮つがあつめしかばこひ出そ見えずれ都ぞ又　季通
自 五月雨に水ゞゆの竹の枝わけばやがて蛍ぞ影にみえける　基実
代 いさらゐのうつる影とも見えばら浪のをする蛍や　りぬ
六 夜の使いとまた蛍の光の露結びて照るとなる　兼らゝ
続 沢辺の水に宿の灯清くぞなめて影ぞ蛍光る　仁和寺宮
代 光をも夕の家ともえ消る草葉にまさる蛍なる　美作
後拾 沢水にうつる足の影ともみつゝそこの蛍なる　良経

叢中蛍

山中蛍火

川蛍

澤辺蛍

湖上蛍火

江蛍

蛍火照舟

名所蛍

蛍火秋近シ

水鶏

水鶏所々

夜水鶏

水鶏驚夜

続　夕月夜浅茅の葉末にかくれねば猶しも蛍見えけり　よみ人しらず

月　しげき野の下にうちかくれつゝ御園に蛍乱れて　定延△

詞　五月闇鵜川にともす篝火の数ますものは蛍なりけり　読人不知

後拾　物思へば沢の蛍も我身よりあくがれ出る玉かとぞ見る　和泉式部

月　夏虫の影やうつさぬ浅沼の蘆間の風に吹乱る　範季

物　難波潟みぎはの蘆の夜をくらみ蛍の影に見えて行けり　雅経

月　とまりてらす蛍は舟の篝火をともすとぞ見る　家仲

新　いさり火の昔の光ほの見えて芦屋の里に飛ぶ蛍かな　摂政

物　白浪に玉江の蘆の葉を分けて秋風ちかく蛍みだるれ　入道二品親王

代　我宿は山もとなれば打はらふ柳の下にたゝく水鶏　平経正

金　夜のまには槙の戸たゝく人もなし我がたゝくなる水鶏なりけり　紫式部

月　里ごとにたゝく水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん　顕綱

月　あけがたに槙の板戸はさゝねども宿の水鶏は猶やたゝかん　公衡

詞　旅寝する夜床はさらに水鶏だに戸にたゝくなる浅き夜の月　忠家

寒夜水鶏

月前水鶏

暁水鶏

暁天水鶏

閑居水鶏

山家水鶏

水鶏何方

南方水鶏

夏月

代　夜もすがら思ふにたゝく水鶏かな明ぬ夜の暁の声　後鳥羽院

空　月のすむ槙の板戸と知らずしてたゞ夜もすがらたゝく水鶏ぞ　中務

物　槙の戸もさゝでやすらふ月影に何をあかずとたゝく水鶏ぞ　紫式部

月　我宿をたゝく水鶏も月影の明行空にたゝくなるらん　秀能

ヽ　夜もすがらたゝく水鶏の天の戸をあけゆく程や打しきるらん　兼政

ヽ　さびしさにまさるあさぢの宿ながらたゝく水鶏の声ぞ聞ゆる　道覚△

後拾　宿る葎の門のいぶせきにさすがにたゝく水鶏なりけり　輔弘

金　夜もすがらはかなくたゝく水鶏かなさせる戸もなき柴の庵を　雅光

月　明ぼのとかさねてたゝく水鶏かな誰が門ならで月の寝覚に　定佐

物　天の戸の月のかよひぢさゝねどもいかなる方にたゝく水鶏ぞ　小少将

月　一声はさらぬだに人の夜もすがら暁たゝく水鶏やなかなか　親盛

後　夏の川辺になれし夜の月を見つゝ月のくもりなき夜は　読人不知

新　庵の西はまだ明けやらぬ宿なれば月のかげさす水鶏なくなり　雅政

物　夜の程の宿に遠く水鶏たゝく月のかげさす戸を　輔親

對泉待月
夏夜暁月
暁夜暁月
短夜月
夏月易明
夏夜数月
夏夜惜月

続拾 夏の夜ハ浜の松にて涼めども猶まちわぶる月の出しほ 仁和寺宮
代 天の戸をあくるまでしも涼しきはたゞさわらぬ夏の夜の月 好忠
金 夏の夜の月待つほどの手すさびに岩もる清水いくむすびしつ 基俊
千 秋ならば稲葉の風も惜しからじ岩もる水に見る夏の月 俊家
月 月ハ猶明くる遠くいでしより稲葉にをしむ夏の夜の月 道因
続拾 夏の夜の月かゝる稲に秋風もまだかよひそ涼しき 内大臣
詞 むつ稲に夏の夜ふけて文きけハ惜しまれてこそいでしかれ 師氏
代 はるゝ風ふくらむ柴月みのわかねに出る夏の空の月 左衛門
金 まつ宇治の山の木のまよりいづれば出る夏の夜の月 親房
千 夏の夜ハ月の光ハさしながらいつに出でる天の戸あけん 宗仲
代 ときわく明けぬる秋との月きれバ秋らしきにかハまれけら 太上天皇
六 夏の夜ハ月まぞわかねかぬ山端のわすの星に涼しきる 讀人不知
続拾 夏の夜の月ハ程なく入ぬとも影ハぐるゝ心に残る 右近
代 秋ちかし安ねるぞ惜しき短夜の夏の夜の月 能輔

夏夜月逢友
夏夜月待人
夏夜月明
水夏月
夏月涼似水
水上夏月
河上夏月
磯夏月
岩夏月
山中夏月
旅所夏月

代 さらぬにもまだぬ雲かくれて出でぞひまなる夏のよの月 以任
仝 心にも見る稲葉し夏の夜の月も花人の涼しかりけり 家経
続後 河風のわたる音まですゞしきに夏の夜の月 資遠
新 まさに苅沼の波に涼めども月の涼しかりける 忠房
六 夏の月光ハまして照れどもすべて涼みつ おきつを
新 秋とさハぎぬる清水の流 顕家
月 久方の月と光にてあかで岩もるみなに影 寂蓮
続 夏川の岩せに宿る月影ハ 仏覚
月 夏の日ハ暮ぬる月の 宗家
続後 加茂川の水底にまで照月ハ よし人家
代 あさき夏の夜よりさしてさゞ波の 清忠
月 を涼しくてつる稲 頼圓
代 山本の月の影 ときより
仝 難波 兼宗

樹杪夜月

有 夜ふかきこずゑの青葉は吹風にさだからぬ夕月夜かな　親佐

水辺夜月

代 木かくれにみえそすれば程もなくさしても夜のふけにけり　為家

雨後夏月

千 夕立のまだ晴やらぬ雲まより月もみえねば月ぞ涼しき　俊恵

有 ゆふだちの晴ゆくをれば板まよりもりくる月の影ぞ涼しき　為家

夏月涼し

新 宿もよし涼しからまし夏衣さえし秋にもなる月かげ　持政

続 をのれてい秋とぞおもふ庭園のすゑの葉分も月かげ　親康

林月夜涼し

後拾 夏のよも涼しかりけり月影は庭の白妙の霜とみえつつ　忠家

金 夜の衣ぬるに庭の涼しく白妙の月の入るぞ惜しけれ　頼仲

水辺夏月似秋

六 夏のよも更ゆけば秋とおもはるる月影はわが袖にぞすむ　讃人不知

有 まつ草の露にやどれる月影はわが袖に結ぶる涼しさ　覚綱

夜月似秋

同 いつはりの宿にぞ我も月さえて秋とおもはする夜の月　重保

叢辺夜月

代 吹風もきえてやすらふ宿の月をみれば秋のよもすがら　惠慶

後 しきぬ夏の衣の月の光や秋とならむ　為家

夏月如秋

千 小萩原まだ花咲ぬ末葉の露の月に結ぶ　教付

寄夏月述懐

有 さゆる身はうき浦まちの夜の月に秋の月かくれにし　重房

今 月と霜秋わかるる月影は月に夜半の露ぞさえける　重保

瞿麦

新 なでしこの花の月影の露にぬれつつ行かな　為家

拾 いろいろに咲きそめぬる月の大和なでしこ　家持

唐撫子

六 なでしこの宿にぞ咲く秋の大和なでしこ　いせ

新 郷を出てまだ見ぬ人の常夏の花　雅宮

野撫子

千 見るに野辺の花の咲きけるに撫子の花ぞ匂ふ　長方

代 露ながら手折りて見ばや大和なでしこの花　和泉式部

岩間撫子

今 岩根にもよそにかかれる秋の花　丹波女王

代 大和には咲かぬなでしこの花　信明

庭床夏

後拾 床夏の庭に咲きぬるなでしこの花　六条頼

籬撫子
撫子露
瞿麦勝恋
折撫子
翫撫子
惜瞿麦
見床夏
毎朝見撫子
独見床夏

代 咲まさる宿の日ぐらしにて籬にわまる大和なでしこ　定家
仝 露とみへば花も露けき袖のうへに咲床夏の露　家隆
仝 春秋と色も中かに床夏の花しかくべき花のうへかれ　小侍従
万 いつまでもくとみのとこのまでこのうれ物さきむ　紀有人
六 つ撰ハえていまうら人の花みきつゝや人まし撫子の花　読人不知
六 家桃にうつらばまつ世まにすぎつゝ人まし撫子の花　読人不知
古 ちり徒ぶにとおもいとどむら咲つゝ妹とかねる床夏のせどの花　躬恒
六 妹とあとぬる床夏の花なればまてくよハ見せん　貫之
仝 うゑつとる我が床に撫子の花のまじらハ何となわかぬ　読人不知
後 床夏の花にみえばことすりにと月日にかくこまん　貫之
拾 床夏の花ぞいらるおもふてぬる月日の我もしれぞ　躬恒
詞 撫子まにかの撫子の花盛いく代の家のいまそら行ら葬　好忠
後拾 見てもさし妹が家ちにそのまもへ家ひとりぬる床夏の家　西宮前左大臣
代 法ろかうん人よりも独のことれがら見とも床夏の家

夕撫子
雨夜田瞿麦
撫子臨露
瞿麦露滋
瞿麦帯小露
夏草
朝夏草
庭夏草
閑庭夏草
籬夏草
野夏草

六 夕暮のまがき小咲る撫子の花とちぎりて人と立しき　読人不知
後拾 うらうんと宿の家に床夏の今さらに家のいかばかり　能因
代 撫子の花咲小ぐら外のはか垣の色のみ見えかしておる　中院入道
仝 まそそか〈我おもひし撫子の花りは我よそれてむ　頼仲
新 白露の色にてゆへるまぜの内に光さくそよ床夏の花　為家
詞 露くおれ垣ねに見よ撫子の花の色すぞ露にぬる　経衡
後拾 夏草ハ結ぶ許にかりぬ野らの跡もわくをかね　堂く
代 野ぐひとし物のはるから晴もうゝ小夢ざれくわら露の　西行
月 ららきせし夏の梢ぞれてなさわりそれるやのをかけ　定家
月 夏みをそらる許小葉かやり帰る人の岩の夏くさ　忠専
代 露くる人まるおれの大葉秋ならされとさびからら　家隆
千 家結ぶ籬小涼さき夏草の何とやすかとしぐの分や　前大政
代 鏡撫しうまの小野のふ葛示ぶまく斗ぬかるから　定通
代 行て結ぶをや咲さ日陰へて世の中の本草運れり　ここ美人

森夏草
切撰夏草
野中夏草
深夏草
海辺夏草
草深隠舟
江夏草
名所夏草
雨後夏草
夏草滋し

後拾　夏深くなりぞしにける大あらきの森の下草なべて人かる　兼盛
月　いとゞしく小さゝら子も長けり夏とはいへど森の下草　大輔
新　夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人も結ぶばかりに　元真
六　深くやは草むらごとに立しければやえぞ掛る床夏の花　読人不知
舟　東路はかくり草の日数へて夏とゝもに深くなりゆく　宮内卿
代　武蔵野は沼の波の菖蒲草末ことに浪に刈ひかり　建保内裏
千　深くとも野辺の草むらのさゆりは浪にも風の吹わけて見れ　行宗
詞　難波江の茂き芦間を漕ぐ舟は棹の音にぞ行方知り　法性寺入道
千　夏深き玉江に茂る芦の葉のそよぐや舟の通ふなるらん　俊恵
新　かくれ沼の入江の末の真菰草いとゞ茂りて刈人もなし　恒寿
代　夕されの野の下草に立鴫の羽音にのみぞ萩にほふなり　入道前関白
新　五月雨は大の河原の末なれば草かるぞ波の下に朽ける　後成
金　けふ里を夕立ちに浅茅生小家のしげり草の露もなし　
六　浅茅生くと繁せまし小夏草の葉に露ぞ置なる　忠岑

夏草露深し
夏草深き
夏草繁
刈ル夏草ヲ
萩待ツ秋ヲ
草花先秋
秋草夏草
野草秋近シ
鵜川

代　夏あさの下葉の露にまよふ身の夕日ともかきさる比かな　好忠
月　いつぞとも人をわけしも夏野の草の露かな　実雄
今　御狩する夏野は草のしげれば野辺を分けこし草のかげする　季経
拾　夏野ゆく中のさかりの花ならば寝るとも人ぞさくらなる　俊光
月　夏草はとまりて野の露おく涼しく人ぞ見ゆる　忠見
月　野辺ごとにきそふる萩の下葉ぞ色まさる花や咲くらん　範仲
千　夏衣とその末となりて萩が花ぞり　直聖
続　秋萩は夏の野辺にぞ咲にけるまだき秋の色を見る　経衡
後　撫子の花咲きにけり秋ぞ来にける　読人不知
万　あひ川のかせどもからぬ家の紐の色はうつろひけり　家持
今　早瀬川はうち流す田川に川せ鳴き　なをし久
代　夕暮の月のひかりに鵜川舟川風寒し　読人不知
月　夕まぐれ鵜舟のかゞり棹さして　俊成

夕鵜川
深夜鵜河
名所鵜川
此鵜舟
鵜川篝
近鵜舟
遠鵜舟
遠村鵜遠火
里放生火
海放生火

新 鵜かひ舟あはれとぞ見るもののふのやそうぢ川の夕やみの空　慈円
代 さ月やみ河下しける鵜舟にさす棹の音も夜はしづかなり　讃岐
今 瀬々川や夢の浮身に秋更てたえて絶し鵜舟の手縄なりけり　兼覚
万 志らゝ川せびぬ瀬ごとにかゞりさし八十伴のをはうかはたちけり　家持
新 久方の中なる川の鵜飼舟いかに契て闇をまつらん　定家
千 早瀬川みをさかのぼる鵜飼舟まづこの世にもいかゞくるしき　崇徳院
新 大井川かゞりさしゆく鵜舟いくせに夏の夜をあかすらん　俊成
月 鵜飼舟高瀬さしこすほどなれやむすぼゝれゆくかゞり火のかげ　寂蓮
六 かゞり火の影をみ川のなかにみて鵜舟のひかりやみにこそあれ　兼光
代 かつ宮井舟さしてぞのぼる夜河の底のみくづをあらはして　太后母
金 大井川岩せう舟の色ねらひおなじに夜をとほさでかへれ　雅定
代 月くれば遠のいさりひとつにて宿のかり田のよし小舟かな　覚性
月 夏くれば宮のやまの里人は鵜をつかふらし　小侍従
なるみ火 まちがたきいさり火のうちにも海の苦をかけてけり　経家

照射
山中照射
深山照射
野照射
遠照射
名所照射
峯照射
連夜照射
暁照射

拾 さ月山木の下闇にともす火は鹿のたちどのしるべなりけり　貫之
月 都出でてはやまにかゝる人もとの夜のはかなきかな　あふみ
千 やみになるほどしとおもへば遠ざかり鹿の音のゆくを見るかな　定保
今 五月闇はやまにともすかゞり火のはてはかなしき人のまどふらむ　顕綱
代 とりはやみ山のはたの鹿の立つ所にこの火は見えずそよぎけり　隆重
千 山のべの松には鹿のあはれにてともしてかゝる　読人不知
代 みなりするとものみえて鹿はかりはなくのみ残るに　忠見
千 ころものすそにさかれ夜ははかなくて山のかけ　通房
金 津の国の鹿の立どはくらけれどともしの火影　仲正
拾 夜の月は鹿の立どのかげにつかふるに　兼盛
千 五月闇さつきのなかにいでし火は宮のかへるとぞ見る　範季
金 鹿のねくまのやまとりのともしの火かげ夜は見えん　宗尊
代 綾なれば峯にともす火のかげに鹿のまどふなり　顕仲
千 ともしするほどのくもりにまきて山の夜の鹿にくらべて　仲正

出羽玉川晩二

蝉

晩風聞蝉

閑中聞蝉

晩夏蝉声

蝉声秋近

寄蝉述懐

蜩

蓮露

千 みなせ川なるかぐの松も清き小島雲の空の月滴るらん　り宗

続 とりしきや山の峯小そゞろ蝉の声ふけゆくなり　忠兼

後 此杜まだ夜の蝉の声と山の蝉の鳴き　読人しらず

新 紫の[illegible]と山の蝉やまだきかん夕暮しらねひぐらしの声　実方

代 山里のそともの外は風よ夕日涼しき日ぐらしの声　遠保[illegible]

後 なく蝉は夜は名のみ夜もの声きこえ人しれ　読人しらず

詞 なそらへ一葉づゝ落る木の下に秋といふなる蝉の声かな　[illegible]

新 秋ちかき日の森に鳴く蝉の声や下葉涼しき　摂政

全 鳴蝉の声は涼しき夕暮に秋ぞ寄る森の下露　讃岐

代 心なくとも蝉のこゑ[illegible]　忠定

全 [illegible]ぞきかぬべき蝉の一声[illegible]　読人しらず

新 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声　式子内親王

月 ゆふ日さす庭の木の葉のとかさびしくも鳴く蜩の声　忠良

古 はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく　遍昭

風前荷露

蓮含露珠

夕顔

瓜

扇

全 はちす葉に置く露の[illegible]人の心ぞ見ゆる　読人不知

月 露のゆくは小もとめしかれる心もと葉に露を入て置[illegible]　全

代 [illegible]露の色ぞとしはしやとらの上に玉ぞしく　資慶

代 夕されば浪ちる池のはちす葉のまろぶ玉さへ[illegible]　[illegible]入道

月 露結ぶ池の蓮葉[illegible]夜の上に玉ぞしく　[illegible]

新 [illegible]の[illegible]夕顔の宿　[illegible]太政

拾 [illegible]遠方人の袖とぞ見ゆる夕顔の花　実宗

代 [illegible]夕顔の[illegible]　朝忠

月 [illegible]夕顔の[illegible]　[illegible]

後拾 [illegible]扇[illegible]　松[illegible]

新 [illegible]涼しさは[illegible]　[illegible]美人[illegible]

全 [illegible]風[illegible]　[illegible]

代 [illegible]小涼しき[illegible]　[illegible]

新 [illegible]の松風まさる[illegible]扇の風[illegible]　枇杷[illegible]

氷室

後拾
夏の日になるまで消ぬ冬氷春たつ風やよきてふくらむ　頼実

千
春秋は後の形見はありけれど氷室の名残や夏の名残や　覚性△

月
あつしさく涼しき色を見するかな氷室の山のこほりなりけり　大炊御門

代
氷室の野におほくの氷もるなれば夏のこほりのとけぬなりけり　仲正

代
くもとなくこほりのすゑにいつも流れ清水のこほりのみ　末宿

新
露むすぶ庭のあさぢのさむしろにしげきに一村さめの夕立のそら　顕経

夕立

夕立ちの雲
市夕立
川夕立
園夕立
野夕立
納涼　避暑同

六
夏の日の織りなる夕立のなごりはまだはれぬものを　よみ人しらず

新
十市には夕立すらし久方の天のかぐ山雲がくれゆく　俊頼

代
かきくもり夕立すらし久方の天のみ空にかかる夕立の雲　宗円△

翰
川こえに夕立すらしそらだにもくもりあふ夕立の空　好忠

代
かきくもり夕立すらし山の端の雲はほのかにかかる夕立の空　後久我

今
庭園のわたりにさける風に夕立のなごりのすずしさ　後京極摂政

新
よられつる野もせの草のかげろひて涼しくくもる夕立の空　西行△

月
家居の木のまに見ゆるいりひの夕立のあとのさびしさ　東常縁△

納涼風

樹陰納涼
松陰納涼
水辺納涼
柳陰納涼
泉辺納涼

新
立よれば涼しかりけり水鳥の青葉の山の松の夕風　忠範

代
風ぞ吹く岩垣清水たちよりて森の下かげ涼しかりけり　前大政

有
日ぐらしの声するやまの松風に岩にそそぐる水の涼しさ　俊大臣

六
たちよりて夕べの下風の吹くなれば夏の内ぞ秋になりける　丹後

続
風そよぐならの木陰の夕涼みまだきに秋の心ちこそすれ　忠良

好
夕されば篠のそよぎに吹く風の末葉に秋のけしきなりけり　後大寺

有
みな月の夕べとはいへど夕立の名残の空に秋ぞ来にける　覚盛△

代
夏の日はすずしかりけり夕暮の空にかかる雲のたえだえ　も明

今
なかなかの夏のうちにも柳葉に吹く風ぞ涼しき　仲実

有
河遠き松の下かげ夏衣かさねて夕べ風ぞ吹きける　経衛

後拾
夏の日は岩に関もる音なれば秋の夕べの心ちこそすれ　実房

新
夏衣立田川原の柳かげ涼みにきつつならす頃かな　忠

新
夕ぐれは夏よりかはりゆくのいさぎよき風ぞ涼しき　和泉

有
風かよふかげの嵐の涼しさに扇をとわすれぬる　兼仲

山家納涼

山陰納涼

浦納涼

船納涼

川辺納涼

水辺納涼

納涼至晩ニ

夜納涼

對泉忘夏

秋對泉ニ

泉聲入夜涼

代 かくれ家の松のしたしいりそむる人もくに涼しからん 西行▲

千 岩ねとく苔の下の音たてて夜にもしられぬ山の下水 教長

新 秋近き外山の陰に思ひつゝ吹きくる風は秋のかぜ 後恵▲

代 夏衣かへらぬうらの浪のまくらに秋ぞ 定家

全 室の浦のせとの早船浪かけてまくる風の涼しさ 信実

同 夕暮る...の柳葉夕日たちねさぞしゆらぐ 後恵▲

翫 風ふけば川辺涼しくよる浪のたちゐてきく秋ぞたつ 家経

千 せみのこゑ山下かげにくれば秋の心ぞ 実快

全 山陰や岩もる水の音さえて夜の中なる日ぐらしの声 慈円▲

代 ...のかげに...夏の夜すがら涼しさ 後鳥羽院

同 いづこ河涼しきこのもとは遠き浪の岩越る 読人しらず

千 岩まもる水の音にせきとめて夜はすがら 後恵▲

同 むすぶ泉の水は結びわびて宿る月のさやけき 定家

後拾 さらにつれ岩井の水は結びねばかねて涼しき 能因

千 さらねども光涼しき夜の月は泉にかげをやどせる 顕昭▲

新 結ぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにける 慈円▲

全 むすぶ手に清き水に月影の宿る夜のさえ 西行▲

続 松がねの岩もる水を結ぶ手に秋やすでにきぬらん 増基法師

続 むすぶ手の岩もる水にかげ見えて夏をわすれぬ水の松影 後徳大寺

代 日ぐらしの声する山の松陰に岩もる水の涼しき 恵慶▲

拾 松が根の岩井の水を結びあげて夏なき年と思ひけるかな 読人しらず

古 夜の風家にはたてば涼しきもの 後鳥羽

金 風ふけば蓮のうき葉に玉こえて涼しくなりぬ日晩の声 俊頼

新 宮城のまどろむ村雨の夜の秋 ...

千 秋風は浪とともにや越えぬらん まだきにかよふ来の松山 頼政

新 草むすぶ野沢の水の音にしてをりしも秋の風 頼政

同 ... 秋はきぬ 式子内親王

代 夕暮の風に夜わたる庵のねざめ 良暹

[illegible]

晩涼如秋
水聞晩涼
樹蔭晩涼
松下逐涼
水辺涼秋
樹陰當暑
晩夏涼
夏祓
河夏祓

代 夕されば篠のをざ原吹風のまだきに秋のけしきなるかな　宇治入道
後拾 夏山のならの葉そよぐ夕暮はことしも秋のこゝちこそすれ　頼綱
千 夕さればたまゐる数もみえねども関の小川の音ぞすゞしき　道経
新 山里の峰のあま雲とだえして夕べ涼しき槇の下露　太上天皇
千 夏衣の花にまて秋風は松の梢の[illegible]ぞ暮るる　具平親王
新 涼しさは秋やかへりて初瀬川ふる川のべの杉の下陰　有家
拾 行末はまだ遠けれど夏山の木の下蔭ぞ立うかりける　忠見
拾 夏山の陰をしげみや玉ぼこの道行人も立とまるらん　貫之
新 [illegible]枝をまつのこずゑに秋にうつるともなき風ぞ吹なる　[illegible]卿
後拾 [illegible]すく夏の涼しく思ゆるは人にしられで秋やきぬらん　堀川
新 夏くさる森の秋の声といはばかり[illegible]にさわぐらん　忠家
後拾 [illegible]かも荒ぶるかみもなごむらんなごしのみそぎ流れば　伊勢大輔
新勅 風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける　家隆
拾 [illegible]涼すゞ川のさゝなみ[illegible]はらへ[illegible]　読人不知

瀬夏祓
滝夏祓
夜夏祓
名所夏祓
六月祓
水辺六月祓
月前六月祓
荒和祓

代 みそぎ河せゞの岩波[illegible]ちりて[illegible]立かへる　読人不知
新 みそぎする川のせ見ればから衣日もゆふぐれに浪ぞ立ける　貫之
六 立田川瀬々のせきもに[illegible]へはいく[illegible]とぞ　読人不知
千 みそぎする川せにさ夜やふけぬらんかへるたもとに秋風ぞ吹　同
勅 [illegible]郷川かは波[illegible]て[illegible]の流[illegible]　中宮[illegible]
後拾 思ふことみなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓つるかな　和泉式部
千 [illegible]しくなりはゆきぬ半月はこえぬ[illegible]夜の夢[illegible]　信実
今 夕ぐれは麻の立枝にゆふかけて夏と秋とのゆきあひ祓ぞする　季通
勅 昨日せの[illegible]ね[illegible]にとぞしてけり[illegible]のまだきとぞしる　後京極
代 [illegible]みそぎする[illegible]のうちはやまのにまだぐりける　大炊御門
月 みそぎする川せに夜は[illegible]ねぬらし[illegible]今日のみそぎ　宮房
拾 みな月のなごしの祓する人はちとせの命のぶといふなり　[illegible]
六 [illegible]すをわくる神よりもまだ[illegible]のみそぎ[illegible]　長能
ねぎごとをきゝぞわくる神なればなべてはまだきのけふ[illegible]　[illegible]の女

秋隣一夜
六月晦の心
夏の終の心
夏雨
晩夏夜雨
夏風
夕風秋近し
夏夕
夕浦夕

金 つくゝくと汀に風の涼しきは一夜はかりて秋そきにける　経隆
古 夏と秋と行かふ空のかよひちはかたへすゝしき風や吹らん　躬恒
六 おしなへて稲葉の露のおきしくは秋の隣にならひやすらん　讃人家
拾 明ぬるか夏の夜のいまさかは秋たちて猶暑き秋にそ有ける　忠岑
代 河風をはせるねまの袖うすきさへはやすらきのゝかや　古[illegible]
六 夕立に夏はいねかりそむらん秋のさかひにとゝむらん　読人不知
金 夏衣たちその草は吹風にさそひにおくそ露もすゝしき　顕季
六 さつき衣うちたかひすし秋まそはこの風のすゝしかりける　兼之
新 夕十謌川おもひはしける秋の来る岩ねの松風　明親
勅 夏衣ゆくてそ涼し禅寺いかの山風ものつらき　家隆
続 秋のくに風のそらく夏しもそ秋すしくに白之ぬる　好忠
詞 せの夕まくへおと今ね草村に秋露をて又鳴く寄らむ　法師しく
新 代は夕つら涼しく又来る夏衣ひはけ葉の露の見ゆし　清輔
代 松かけの夕に夕涼しきる浦人の夕ました遠そこらくか　家隆

夏山夕
暮夜
夏私興
夏夜類し
竹風
夏曉

代 夏さへ涼しく雲ねたら山本の木ころも風の夜の夕かけ　頼資
古 夏の夜ハまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとるらん　深養父
六 ひるしみれハさらくねかん夏衣ゆくとしられハゆくかね　讃人家
代 夏のもいまゝくたちけは枝のしへぬすらの夕暮〳〵　重之めり
金 かゝり火の流れまき蛍の下もえハそゝろくふりけり　家隆
六 月ならに分てもやそ夏の夜ハ山の端ちかく入ぬる　恵文
古 夏の夜の風かちたもとを夕風そ涼く鳴けれる　中務
後 いつくらにたえ堪しき社鶴一声ハわく夕もかのしれ　読人不知
代 夏のたハ浦あらの子ねにおろしそくかぬるもゆくとしらし　中務
枕 夏宝の白波のてらもまきしきにたる旅くばかりに　好忠
詞 夏の夜ハ雲の小笹のつちのそらをあゝ行きもすゝや　西行
新 宝あさきまち竹の葉すまて風の音にいとと旅さひてきくる夏　式子内親王
後 けにかしの嶺かえて鳴りは夜のそゝてる月そくるる　読人不知
代 一声のおまね是なかり杜鵑御身を夕の聲ふぬるく　家隆

夏山
夜雲
夏里
夏旅郷
関路夏
夏鐵別
夏船
船中時鳥
夜船中

万 春過て夏きにけらし白妙の衣ほしたり天のかぐ山　持統天皇
拾 のどかせば静かなるいはく山秋まつほどの岩にかゝれ　能宣
拾 大あらきの森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな　忠岑
新 杉の館まつ程は御園の森の茂みにうちもねられず　紫式部
拾 なかなかに見えぬ大空の星影もなほ行きかよふ　篁
勅 宿かりし人の涙の夜衣はまだ雲の上の露　家隆
代 夏来ればまだ山ぶかき宿のこゝろを　…
後拾 越えてゆく人もなければ関の夕風すゞしく　赤染
拾 夜衣ちかくなりぬとや思ひそめし　…
新 立ちよれる清水の月影いとゞしく　…
万 夏草の花摘みかねて見る人もなし　定守
今 岩くゞる滝にとどろく鳴る蝉の声きけば　兼盛
新 夏かりの葦のかりねもあはれなり玉江の月のあけがたの空　俊成

社頭夏
夏寺
夜井
夏川
夜涼
夏海辺
夏舟
又島
夏獣
夏禽

月 ゆふしでの榊の枝にかけてけり　宗光母
代 森の下の水の涼しき　大中臣輔親
新 山寺の林に夏の花咲きて　肥後
代 小笹原浅茅の露の井にやどる月影　好忠
朝 松川の千代のためしの枕なる夜は涼しさを　今
代 かゞり火の河浪さわぐ夜川の舟のかげ　献固
今 夜川の瀬々に鮎汲む人の影ぞ見る　好忠
千 岩間より落ちくる滝の白糸は結ばで見るも涼しかりけり　忠方
代 夏の日のかげろふ海の浪の上に　為宗
日 みしま江の玉江のまこも夏刈りに　右権
後拾 夜のほどの玉江の葦のかりそめに　亀之
今 夏衣きてしも山の郭公　讀人不知
代 くらくらに原野のまこもの草の　西行
万 うまさけの蓑山の野の夏草に　作者不詳

夏野
夏衣
夏氷
夏夜
夏眺望
夏人事
夏述懐
夏情

万 かきつばた衣に摺りつけますらをのきそひ狩する月はきにけり　家持
月 夏草はしげりにけらの[illegible]　久[illegible]
後拾 ひとへなる蝉の羽衣夏はなほうすしといへどあつくぞありける　能因
物 ぬるゝ木のまもりくる月影の光もうすき蝉のは衣　如親
新朝 つげまかで[illegible]の五月雨にいそぎ[illegible]夏山の氷　道房
六 ことのはよひびき[illegible]峯松風とともに[illegible]　讀人不知
物 [illegible]五月の光[illegible]夏草葉を[illegible]　仝
万 夏は[illegible]ほとゝぎす[illegible]　[illegible]
万 [illegible]のさ[illegible]　[illegible]
後 [illegible]つゝ[illegible]鳴杜鵑[illegible]の枝[illegible]　[illegible]
六 [illegible]
代 夏虫の[illegible]　[illegible]
続 [illegible]花橘の[illegible]　為清

夏釈教
夏祝
夏神祇
夏秋楽
四月
五月
閏五月
六月立秋

拾 [illegible]の衣[illegible]　實方
物 はちすばの[illegible]　道綱母
六 [illegible]花橘[illegible]　[illegible]
詞 大ぬさの川のせごとに[illegible]　[illegible]
新 榊とる夏の山路や[illegible]　兼昌
六 [illegible]の中なる神の[illegible]　[illegible]
続 [illegible]川[illegible]　仝
千 みそぎ[illegible]川中の榊[illegible]　忠岑
物 杜鵑[illegible]　家隆
六 さ月なる[illegible]　貫之
仝 千秋[illegible]　仝
金 六月のてる日の影は[illegible]秋の[illegible]　[illegible]
有 [illegible]秋[illegible]　摂政左大臣
[illegible]　読人しらず

閏六月吉日　朔　筆をとりて難しとも御儀のわくまゝ叢書を示すまゝめて　大貮